

◇◇◇◇ シリーズ 「会員のつづやき」 ◇◇◇◇

## 二刀流で感じた産学のニーズとシーズ

大和製罐株式会社, 山形大学工学部

赤地利幸

私事で大変恐縮ですが、2023、2024年は職場環境が大きく変わった年でした。それまでの25年間、当社の研究開発部門に所属して食品工学に関わる研究開発に携わり、最後は総合研究所長まで務めさせていただきましたが、2023年4月から、サステナビリティ推進を担う環境室へと異動になり、地球温暖化対策やリサイクルの推進などに携わっております。また、2024年4月からは山形大学工学部の客員准教授の任を承り、総合研究所時代に注力していた3Dフードプリンターの研究開発を今までとは違う視点で継続させて頂いています。様々なご縁のおかげで、サステナビリティと研究開発の「二刀流」をさせて頂いております。

日本食品工学会は他の学会と比べ、産業界の参加者、参加企業が多く、インダストリー委員会活動に代表されるような、産学連携に力を入れている点が大きな特長であると感じています。企業の開発部門に永らく所属してきて、今、大学側の研究開発に参加させて頂こう立場が変わった私の視点から見た、産学の研究開発に対する姿勢や環境の違いを、想いも含めて書いてみようと思いました。

大きな違いは研究開発の目的・姿勢です。企業の研究開発は「研究<開発」で、基礎研究が疎かになり、応用開発や商品開発に重きが置かれる傾向にあります。中長期的な研究は先々の利益確保が見通しにくく、新規事業開発などでも、比較的早く利益確保の見通しが求められます。企業ごとの風土や体力の違いもあるとは思いますが、成果は利益や知財で計られることが多いので、開発中断なども割とよくある事です。開発テーマは企業の戦略に従って選定されるので、一研究者としてやりたい事=やれる事ではない事がほとんどでしょう。一方、大学における研究開発は、一般に「研

究>開発」で、基礎研究、応用研究に重きが置かれ、商品開発的なプロセスは原則ありません。大学の先生は大概、主たる研究テーマを持たれており、ライフワークとして手を変え、視点を変え、手段を変えて、一つのテーマを発散あるいは昇華させていく、という印象があります。当然、やりたい事=やれる事であり、成果は論文や知財の中身であり、研究者としての研究意欲と資金（重要）が続く限り突き詰めていけるとい、企業側から見ると羨ましい面もあります。

一方で、研究資金については真逆の環境かと思えます。企業は利益計画に沿って研究開発への投資を決めるため、開発テーマには必要な予算が付きます。もちろん無尽蔵ではないですが、開発をやりきるまでの費用は会社が用意する事が普通なので、一研究者が資金調達で苦慮するという事はありません（予算確保のための社内手続きという苦労はあります）。対して大学は研究費の大部分を自ら調達しなければならず、科研費等の公的研究費の採択を受けたり、企業等の委託研究によって研究費の支援を得ることが多いと思えます。

大学の基礎研究と企業の応用開発を一つのサプライチェーンのように考えた時、上流にいて基礎研究で知見を生み出す大学と、下流にいて応用開発で新たな商品や利益を生み出す企業は、大学側からの知財の提供、企業側からの利益の還元で繋がった時に互いの強みを最大限生かせる関係性が築けると思えます。そのためには大学の研究シーズと企業の開発ニーズのマッチングは重要であり、日本食品工学会が貢献できる場なのではないかと思う訳です。今、ありがたい事に産学の連携に関われる立場を頂いて、橋渡し役になれば最高だなと思っています。

赤地利幸 (Toshiyuki AKACHI)

1994年 静岡大学大学院農学研究科修了

1994年 大和製罐株式会社入社、品証部を経て総合研究所勤務

2010年 岐阜大学連合大学院連合農学研究科修了、博士（農学）

2023年 大和製罐株式会社環境室長

2024年 山形大学工学部客員准教授

〒100-7009 東京都千代田区丸の内2-7-2 JPタワー9階

E-mail: t-akachi@mail.daiwa-can.co.jp